覇権交代8

香港ジレンマ

大石英司
Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　安田忠幸

目　次

プロローグ　13
第一章　棺桶と生足　20
第二章　復興とＶＩＰ　40
第三章　ドローン攻撃　67
第四章　イスラエル　94
第五章　トルクレンチ作戦　119
第六章　輝く星　147
第七章　ゾーニング　172
第八章　戦士の帰還　198
エピローグ　216

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

土門康平　陸将補。水陸機動団長。海南島で戦死した水機団長の後任として、小磯の戦時権限で水陸機動団長、陸将補に昇進した。現在、少々浮かれぎみで部下たちに嫌がられている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

原田拓海　一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

畑友之　曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

高山健　一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

大城雅彦　一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

水野智雄　一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

田口芯太　二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実　三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

吾妻大樹　三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

姜彩夏　三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

漆原武富　曹長。姜小隊ナンバー２。コードネーム：バレル。

福留弾　一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

井伊翔　一曹。姜小隊のＩＴエンジニア。コードネーム：リベット。

御堂走馬　二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

姉小路実篤　二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。
川西雅文　三曹。元Ｊリーガー。コードネーム：キック。
由良慎司　三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。
小田桐将　三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。
阿比留憲　三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。
赤羽拓真　士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

甘利宏　一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

〈水陸機動団〉

司馬光　水陸機動団教官。香港に潜入して、本土派と接触している。

上園広樹　陸将補。水陸機動団長。不運にも流れ弾に当たり戦死した。
袴田輝男　一佐。水陸機動団幕僚長。
宗像晋　二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。
岩永誉　一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。
達村茂人　曹長。岩永誉一尉の女房役。
榊原啓介　三曹。地元は九州。

〈第一ヘリコプター団〉

村田護人　三佐。村田家次男。
村田凜子　一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

〔西部方面隊〕

葉室泰徳　二佐。西部方面隊西部方面ヘリコプター隊の副隊長。村田護人三佐が教育部隊を出てはじめてＵＨ－１汎用ヘリの操縦桿を握った時の上官。
和嶋瑞恵　一尉。ＣＨのベテラン機長。

〈海上自衛隊〉

〔南支派遣艦隊〕

高遠雅也　海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

染谷俊雄　一佐。首席幕僚。
板東兼人　一佐。〝かが〟艦長。
兼坂すみれ　二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕
藤原美沙　二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるＵ－36Ａのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕
五味勇美　海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。Ｐ－３Ｃ乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。
江川俊樹　海将補。
竹内幸輔　一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦〝ほうしょう〟〕
泉田宣泳　一佐。艦長。
橋口肇　二佐。副長。
宮城明日香　一尉。気象班長。

〔哨戒機部隊〕
波多野誠　一佐。〝ヤマタノオロチ〟、戦術航空士（TACCO）役。テスト・パイロットであると同時に、マサチューセッツ工科大学で航空工学の博士号を取った変わり者。コールサイン：メデューサ。
田端悟郎　二佐。〝ヤマタノオロチ〟機長。
結城美佐紀　一尉。〝ヤマタノオロチ〟副操縦士。

〈航空自衛隊〉

〔二〇二飛行隊〕
村田先斗　二佐。Ｆ－35Ａに乗る。村田護人、凜子の兄。

〈統合幕僚監部〉
小磯小代里　統合幕僚監部参事官付国外運用班長。青柳睦己と岩倉久彌を尻に敷く督戦隊の官僚三人組の一人。制服組からは蛇蝎の如く嫌われている。

〈防衛装備庁〉
島崎蒼士　技官。航法援助のシステム開発を行う若手。

〈海上保安庁〉
宇垣詠志朗　二等海上保安正。〝なつぐも〟艇長。
石橋大介　三等海上保安正。〝なつぐも〟副長兼機関長。

梅野征悦　二等海上保安士。〝なつぐも〟レーダー担当。

《内閣府》

古賀肇　内閣府政策統括官（経済財政運営担当）。

《内閣官房》

青柳睦己　内閣安全保障・危機管理室室長補佐。若手防衛官僚のホープだが、慎重派。海南島上陸作戦にも反対していた。

《外務省》

岩倉久彌　総合外交政策局安全保障政策課課長補佐。北米課が古巣。自ら国務省霞ヶ関出張所と自嘲するほどの対米従属派。

〔吉野ヶ里〕

盛田浩太郎　吉野ヶ里中学校の校長。

白崎征途　吉野ヶ里中学校の教頭。

華原沙也　吉野ヶ里中学校の音楽教師。

文暁庭　韓国から交換留学で吉野ヶ里中学校が受け入れていた若い教師。九大に留学していた。

葉室翼　吉野ヶ里中学校の新聞部部長。

枝野君枝　吉野ヶ里中学校の新聞部員。玄武ミサイルで軽傷を負う。

古賀裕史　文暁庭と交換留学で韓国の釜山東中を訪れている佐賀県の教師。

宇垣詠美　記者。地元新聞社の入社三年目。全国紙を落ちて地元新聞社に就職。佐賀出身で宇垣詠志朗二等海上保安正の妹。

澤井芽俱　インターネット・メディア会社の編集者にしてライター。〝ゆう君ママの戦場リポート〟を配信している。

アメリカ

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン　大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン　国務長官。

コリン・コンラッド　大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン　新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー　ホワイトハウス広報室長。

〈国家安全保障局〉(NSA)

ベッティ・マイズナー　空軍少佐。戦死したカズオ・レベジェフの恋人だった。

〔ソウルアメリカ大使館〕

ロバート・B・ワイズナー　大使。元太平洋軍司令官（海軍大将）。

コーディ・R・キム　政務官。国務省のキャリア外交官で、ワイズナーが韓国へ赴任する時、自ら指名してソウルに連れてきた人物。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカート　海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

〔第三海兵遠征軍〕

ウェイン・R・ヴァンペルト　中将。第三海兵遠征軍司令官。海南島攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス　少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック　中佐。航空参謀。F－35Bのパイロット。

〔第三海兵師団第三偵察大隊B中隊〕

アルベルト・タイラー（フォーヌ・リーコン）　中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊武装偵察隊を指揮。

エイベル・リンカーン　曹長。アルベルト・タイラー中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス　伍長。

〈陸軍〉

デレク・キング　中将。黒人の陸軍中将。別名クラッシャー・キング。海口攻略の海兵隊を指揮するためにきた。

ダニー・ジェンキンズ　少佐。陸軍の心理カウンセラー。心的外傷後ストレス障害（PTSD）の治療を専門としている。元グリーンベレー指揮官で心理戦のスペシャリスト。デレク・キングのお目付役。

中国

《中央弁公庁》

範学毛（ファンシュエマオ）　中国共産党中央弁公庁主任。

賈礼（チャブリィ）　日本の中国大使館経済処参事官。

〈陸軍〉

〔海南島独立守備隊〕

毛愛軍（マオアイチュン）　少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

黄冠英（ホアンクアンイン）　大佐。作戦参謀。

〔第一〇一待機旅団〕

林剛（リンカン）　大佐。これまでの功績により昇進し、新たに第一〇一待機旅団の指揮をとることになった。

石萌（シィモン）　中佐。ハワイでの戦いにおいて情報参謀として素晴らしい働きをみせて中佐に昇進し、部隊を率いることになる。

蘇桐（スゥトン）　中佐。情報参謀だったが、石萌が参謀長役を固辞したため参謀長に昇進。

〔第22連隊〕

銭宏大（チィエンホンタァ）　中佐。第22連隊政治将校団副隊長。

侯燁（ホォウイエ）　少佐。銭の部下。

（瀋陽（シェンヤン）航空宇宙大学）

周冰冰（ジュウビンビン）　博士。瀋陽航空宇宙大学。丸眼鏡の小柄な女性。

皓宇（ハオユー）　瀋陽航空宇宙大学の学生。

（香港）

徐裕堅（シュイユウキン）　元高級警司で、香港警務処機動部隊を率いていた。〈スケアクロウ〉の正体にして、姚芳芳の恋人。

姚芳芳（ヤオファンファン）　クー・シェンロンの妻にして、香港のジャンヌ・ダルク。今は香港に舞い戻っている。

陸海栄（ルゥホイウィン）　学生運動家。学費のために自ら二重スパイを志願していた。

アグネス・リョン　日本のニュース番組に出て、堪能な日本語を話す有名人。

大韓民国

《国家情報院》

柳珍熙（リュジン）　副長官。

池俊烈（チ ジュンユル）　中佐。副理事官。

洪應善（ホンウンソン）　韓国大使館参与の肩書きをもつ。融和委員会のメンバー。

〈空軍〉

〔第11戦闘航空団〕

孫庚泰（ソンキョンテ）　少将。航空団を指揮する。

呉京周（オ キョンジュ）　中佐。第112戦闘飛行隊を率いる。

辺光敏（ビョンガンミン）　少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

金真一（キムジンイル）　少将。韓米同盟艦隊司令官。

〔海軍第五戦団〕

厳鐘元（オムジョンウォン）　大佐。参謀長。

南智勲（ナムジフン）　少佐。〝金寿鉉（キムスヒョン）〟、艇長。

張日載（チャンイルジェ）　大尉。副長。

〔第九八潜水戦隊〕

朴永中（パクヨンジュン）　中佐。孫元一（ソンウォニル）級潜水艦の七番艦〝洪範図（ホンボムド）〟、艦長。

田英学（チョンヨンハ）　少佐。〝洪範図〟、副長。戦争になる直前にソウルから異動してきた。

斤永（クンヨン）　中尉。航海班員。

〈海兵隊〉

孫周原（ソンジュウォン）　少将。海兵隊部隊を率いる。

斤孝相（クンヒョサン）　大佐。

白珉台（パクミンテ）　中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

鄭大恩（チョンデウン）　少佐。副隊長。

〔第二海兵師団〕

尹白龍（ユンベクヨン）　大佐。第二海兵師団第二戦車大隊を率いる。

シンガポール

クー・シェンロン　元首相。夫人は香港人の民主運動家であった姚芳芳（ヤオファンファン）。

ウン・テクバ　外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

覇権交代８　香港ジレンマ

プロローグ

韓国空軍第11戦闘航空団・第112戦闘飛行隊を率いる呉京周中佐は、八機のF－15K〝スラム・イーグル〟戦闘機を率いて航空自衛隊築城基地を離陸し、対馬海峡を越えた。

編隊長機の後席には、亡命時にも乗っていたアメリカ空軍の連絡将校クロエ・R・ワーグナー大尉もいる。彼女の存在は、いろいろな意味で保険であった。

日本へ亡命した彼らが対馬海峡を越えるのはこれが初めてではない。幸い、これまで韓国領土をスラム・イーグルで爆撃や攻撃することはなかったが、米空軍の爆撃にはエアカバー部隊として何度か随伴していたのだ。

韓国本土の全ての空軍基地は、滑走路に穴が空いている。米軍は、地上の戦闘機を潰滅する気は無いらしく、ハンガーの類は無事だ。滑走路の復旧は可能だったが、復旧と破壊のイタチごっこを避けるため、穴が空いたまま放置されているのだろう。

誘導路を使えば離着陸できないこともなさそうだが、空軍はそこまでして米軍に楯突く気はなさそうだ。

だが、大統領派の海兵隊や陸軍の地上防空部隊が仕掛けてくる可能性は皆無では無い。韓国は全

土が停電している。韓国が韓米同盟を捨てて中国との同盟に走ってから全ての港湾は機雷封鎖され、原油備蓄基地は爆撃されて今も燃え続けている。

最初、韓国は中国からの援助物資に期待したが、アメリカは早々に鴨緑江（オウリョッコウ）にかかる橋を爆撃した。その際も、呉中佐の部隊は米軍機のエスコートという形で出撃していた。

全土の上下水道も止まり、民衆は飢えはじめた。人道上の措置（そち）として、米政府了解のもとで掃海部隊が日本から釜山（プサン）に派遣され、甘川湾で機雷掃海した。そのため海路からの補給物資が入ったが、それは量も限られているものだ。せいぜい、子供に与えるミルクと、医薬品がいくらか入ってくるだけ。

それを大規模な援助に格上げさせる目的で、釜山市は、反日を掲げる市長の首をすげ替えて、事実上の独立を宣言した。

空軍は、結果的にうまく立ち回ったといえる。脱出できた戦闘機部隊は自分らだけだったが、その後も滑走路を破壊される前に、空中給油機や輸送機などが五月雨式（さみだれ）に韓国を出て日本の自衛隊基地に避難することができていた。

釜山市が独立を宣言してからまだほんの数時間しか経っていないが、アメリカに留まっていた民航機が日本で支援物資を積み込んで、それがもう少しで釜山に到着する。

呉京周中佐らはその露払（つゆはら）いとして釜山上空の安全を確保し、民航機を離着陸させる任務を負っていたのだ。

釜山が視界に入ってきた。洋上には、機雷掃海にあたる海上自衛隊の部隊と、それを守りエスコートしている海上保安庁の巡視艇がいた。韓国側からは韓国海軍のミサイル艇、海洋警察庁の警備艇が出ているようだ。

また、入港待ちの貨物船やフェリーが一列になっている。残念だが、その数は決して多くはない。物資を陸揚げしても、それを陸送するトラックの燃料が今は無いのだ。この問題を解決するため、今日から鉄道駅が近い港の掃海がはじまった。

電車を動かすための発電所の燃料も、日本側が提供してくれることになっている。それとは別に、医薬品等を空輸するため金海国際空港が再開されることにもなっていた。ここは軍民共用空港だが、戦闘機がいるわけではないので、幸い爆撃は免れていた。この規模の空港としては、奇跡的に無傷な状態だと言える。

地上を威圧するため、少しずつ高度を下げた。

地上からのレーダー波は一切無く、民航機を離着陸させるからには、その安全な誘導も懸案事項であった。空港のレーダーや誘導ビーコンを作動させる燃料も、日本から融通する必要があるだろう。金海国際空港は洛東江の広大なデルタ地帯にあるが、滑走路の延長上には山があり、過去にはそこに民航機が激突する事故も起きていた。

上空一五〇〇〇フィートに率いてきた編隊を残し、呉中佐は僚機とともにぐんぐん高度を下げる。

地上ではあちらこちらで火災が起こっていた。家庭でも燃料が尽きたため、ゴミを燃やして調理しているからだと聞いている。

空港を旋回するように場周経路に乗った。滑走路上に機体はなく、航空局の数台の作業車がクリーンナップ作業にあたっていた。

改めて見たレーダーには自分たち以外に飛んでいる機体はおらず、地上からこちらを監視する対空システムのレーダー波もない。だがしばらくすると、空軍のハンガー前から何かが滑走をはじめた。滑走路ではなく、誘導路を走って離陸してくる。小型の単発機だ。

翼端と垂直尾翼が赤く塗られている。空軍のKT－1初等練習機だった。機体は、ほんの三〇〇メートル滑走しただけで離陸した。ほとんど燃料を搭載していないのだろう。

鮮やかな離陸だ。そのまま強引に上昇してくる。飛行課程では、絶対にやるなと厳命されるものだが、このKT－1は単発練習機ながらそれだけのパワーをもっていた。

上空から練習機のコクピットを見下ろすと、前席にパイロットが一人しかいない。ここで自機がオーバーシュートしそうになったため、中佐は速度を絞り、さらに脚を降ろしてやや機首を上げた。失速警報が鳴りはじめたので切る。

KT－1の真横に並んで速度と高度を同調させた。相手は、一瞬翼を左右に振って友好の証を示すと、ヘルメットのバイザーを上げる。

自分が脱出してきた第11戦闘航空団を率いる孫庚泰（ソンキョンテ）空軍少将だった。孫将軍は、身振りで沖合へ出ろと合図してきた。地上部隊には無線を傍受されたくないらしい。

ゆっくりと旋回し釜山の沖合へと出る。海上自衛隊が拠点にしている巨済（コジェ）島のオクポ湾沖まで、徐々に高度を下げながら飛んだ。

高度二〇〇〇フィート以下。練習機との間隔をほんの三〇メートルほどに狭めると、将軍はヘルメットのインカムに手を宛がい、無線を入れるよう伝えてくる。

「……ワーグナー大尉、まずは君が未だにこの機体に乗っていることに感謝するよ。韓国民は、アメリカの友情を永遠に記憶することだろう」

「ご無事で何よりです、将軍。自分は後から伺いますので、どうぞ中佐とお話しください」

「では、遠慮無くそうするよ」

ここから孫は、母国語に切り替え話しはじめた。

「呉中佐――燃料が無いため長くは飛べん。簡潔に説明する。大邱から南の安全は確保されていると思ってくれ。つまり、釜山から一〇〇キロ圏内だ。海兵隊はまだ大統領側についているが、釜山への補給を円滑に進めるために、釜山及びその周辺地区での武装解除に応じた。地上も空も安全だ。もちろん、海もな。ソウル方面だが、陸海空の指導者たちが青瓦台へと赴き、大統領に辞任を迫っている。家族と側近を連れ、対岸の青島に飛ぶための輸送機を一機提供することをわれわれは提案している。大統領が受け入れるかどうかは、まだ聞いていない。明け方から説得にかかっているはずだから、向こうはまだ粘っているということだろう。こちらからは以上だ」

そう言うと少将は、スラム・イーグルを見た。

「了解しました。こちらからの警告――こちらというか、米軍の通告です。ただちに大統領の辞任を求める。そして米日韓の連合国に韓国が復帰することを要求する。それが受け入れられない場合は、米空軍は次の行動に移る。製鉄所、造船所、半導体生産工場などの韓国の貿易インフラを爆撃する。この破壊から韓国が立ち直るには、最低でも三年かかる試算が出ているため、連合国は、韓国人が速やかに賢明な判断を下すことを求める。――以上です」

「了解した。まあ、そんなところだろうな。いざとなったら、君らの手で青瓦台を爆撃してくれ。それでやっとソウル市民は状況を飲み込むだろう。あとこれは指揮権を奪還してからになるが、大邱基地だけは滑走路を復旧する準備を進めている。米側に了解をとってくれ。もし韓米同盟復活となったら、その途端に中国が何かしでかすだろうからな。それなりの備えはしておきたいと」

「全て了解しました。滑走路が復旧次第、自分も

部隊を引き連れ帰還します」
「そうしてほしい。……おっと、燃料警告灯が鳴りはじめた。私は引き返すよ」
「大丈夫ですか？」
「心配するな。いざとなれば、どこかに不時着するさ」
　ＫＴ－１は編隊を解くと、ゆっくり上昇をはじめた。孫はベテランの戦闘機乗りだ。大丈夫だろう。
　呉中佐は、ＫＴ－１の倍の速度で上昇しながら後席のワーグナー大尉に今の会話を説明した。
「……期待してもいいのでしょうか」
「未明に就任したばかりの釜山新市長の、ラジオ演説を初めて聞いたが、なかなかうまい。脚本を書いた連中はいるんだろうがね」
「ええ。彼女の英語スピーチ、わかりやすくていいですね。アメリカ人には受けますよ。観光担当だっただけのことはあります」
　ラジオを使い朝から晩まで反日をぶっていた前市長が事実上のクーデターで追われると、観光担当だった女性副市長が新たな市長として市議会の満場一致で選出された。
　彼女は「独立」こそ口にしなかったが、大統領府の命令は一切受けないことを宣言し、陸海空軍の庇護（ひご）のもと、この釜山の自治を回復し、日本からの援助物資を受け入れることに全力を尽くすと宣言したのだ。
　中佐の機体が空港上空一〇〇〇〇フィートに達する頃、大韓航空のボーイング７７７旅客機が洋上から進入して鮮やかな着陸をやってのけた。
　その横で孫少将が操縦するＫＴ－１練習機は、軍のエプロン・エリアへ直接着陸した。
　釜山の復興は、まだはじまったばかりだ。
　韓国全土では、透析（とうせき）ができない糖尿病患者がバ

タバタと倒れ、乳飲み子や子供たちが飢えていた。

不幸なボタンの掛け違いから、世界大戦がはじまった。南シナ海の人工島攻撃と艦隊戦、またアメリカでは中国が仕掛けたサイバー攻撃で電力網がダウン。それをきっかけに空港の管制システムもダウンし、日英を含む三機の旅客機が多重事故を起こして夥しい犠牲者が出た。

この報復としてアメリカは中国本土のサイバー部隊の本拠地を爆撃し、戦線は一気に拡大した。

その後中国はオアフ島に部隊を上陸させ、一時的とはいえ、島の占領に成功。またアメリカがハワイ奪還作戦に躍起になっている中で、外交面で着々と手を打ち、まずは韓国、シンガポールを仲間に引き入れる。

この中国の動きに対し、日米両軍は中国最南端の海南島に上陸。全島制圧を目指して北上し、これはあと一歩のところまで完了していた。

しかし、海南島攻略がさして効果が無いことを悟ると、日米、そして英国は、次に香港での学生運動に燃料を投下し、香港騒乱を煽り北京政府を刺激する方向に作戦を切り替えたのだ。

戦いは終盤に入っているはずだが、終わりがどこにあるのか、どうやったら終わるのか、それは誰にも予測できなくなっていた。

第一章　棺桶と生足

海南島・海口（カイコウ）市――。

海南島占領を目指す海兵隊部隊と陸上自衛隊水陸機動団部隊は、海南島の大陸側との接点にして人民解放軍最後の砦でもある海口市に迫っていた。

人口は二〇〇万人。その大半はとっくに大陸に脱出していたが、島全体からの避難民や、南部のリゾート地帯で働いていた外国人労働者たちが殺到していたため、市内にはまだ一〇〇万人ほどの民間人が留まっている。

前夜、市内への侵攻を試みた日米両軍は、敵の待ち伏せ攻撃にあい夜間の進撃を停止した。抵抗は覚悟していたが、これまでの耕作地帯での殴り合いから都市構造物を利用した都市ゲリラ戦への移行で、海兵隊は戸惑っているという感じだった。

自衛隊は、その海兵隊の後塵（こうじん）を拝して戦っていた。海兵隊が独力で島を占領したという状況を演出するためにも、海兵隊より自衛隊が前面に出る機会はほとんど無い。もちろん、それで自衛隊が安全というわけではなかったし、暇な時間などもない。

そして三日三晩に及ぶ過酷な戦闘が続く様子を尻目に、東京では新たな厄介事が持ち上がっていた。カナダ発という形で、グアムの米軍基地内に安置されている自衛官の棺桶（かんおけ）の写真がリークされ

たのだ。

それは、ハンガーの床に整然と並べられている棺の写真だった。九割には日の丸の旗が被せられている。端には、旭日旗の旗で覆われた棺も見える。海上自衛官の棺だ。

SNS上にアップされたこの写真は「海南島における自衛官二〇〇名の棺桶」というキャプションも付けられていた。

これは、決して公開されてはならない写真だった。日本政府は、朝からそのスクープ写真を巡りてんやわんやだったが、それを打ち消すカウンター情報が突然炸裂したため、戦場まで混乱に陥ることとなった。

海口市郊外の森の中に作られた水機団の野戦指揮所では、部隊を率いる土門康平陸将補が遠くから聞こえてくる重機のうなり声を聞いていた。

ここは海兵隊が死闘を繰り広げて確保した加來空軍基地から、直線距離で六〇キロ離れている場所だ。ほとんど無傷の高速道路が走っているが、もしこのまま海口市を占領することになると、解放軍はこのロジを狙い仕掛けてくる可能性がかなり高い。さらに、一〇〇キロ以上走ることになる加來基地に、補給を依存するわけにもいかなかった。

そのため海口市に入ってすぐの場所に、野戦飛行場を作ることになった。直線が続く高速道路を改造したもので、陸自の工兵部隊がまず障害物を排除し、ヘリコプターで米海兵隊と米陸軍が重機を入れて長さ二〇〇〇メートルの滑走路を確保する。午後には第一陣の輸送機が着陸できるようにと、猛烈なスピードで工事が行われていた。

土門はここで幕僚長の袴田輝男一佐が差し出してきた一〇インチのタブレット端末を見た。そこには写真が表示されている。それはハンガーの

二階部分、キャットウォークから見下ろすようにして撮られている棺の写真だった。東京から派遣された儀仗隊の隊員が壁際に等間隔で並び、捧げ銃の姿勢で棺を守っている。

「なんでこんな写真が外部に漏れたの？」

「米軍からの情報ですが、兵站で協力しているカナダ軍の航空機関士のSNSにアップされたそうです。ですが、その兵士はこの写真がアップされた時間帯はまだ太平洋上にあって、インターネットに接続することはできなかったし、本人も否定しています。その兵士が使っていた中華製スマホは以前から情報が抜かれていたため、米側の見立てでは、おそらく中国が、兵士がまだグアムに滞在している隙にスマホの写真を覗いて、SNSのアカウントを乗っ取った後、情報戦に利用したのだろうと。カナダ軍、米軍は、ただちに中華製スマホの利用者に警告したそうですが」

「でも、手遅れだよね。政府はどうやって隠蔽するの？　そもそも、ここで戦死者が出たということは国民に秘密なのにさ。陸自が海南島にいることすら、公には認めていないじゃない」

「われわれがあれこれ心配してもどうにもならん話ではありますがね」

「それにしても、二〇〇名も死んだのか」

土門は他人事のように漏らした。

「ヘリパイ、戦闘機パイロットもいるとはいえ、ほとんどはうちの部隊ですからね。一個中隊もの戦死者を出したかと思うと……。しかし、ほとんどは前任者時代の戦死ですから、土門陸将補が気に病む必要はありません」

「……そういえばこれ、水機団長が戦死したこともニュースになっているの？」

「いえ、まだそこまでは」

土門は、つい先日戦死した前任者に代わって水

機団長を拝命したばかりだ。

「それで、隊員はもう知っているの？　たぶん、自分は無事だということを、みんな家族に報せたいだろうとは思うが」

「人の口に戸は立てられません。これと一緒に、あっという間に拡散しました。弾が飛ぶより速く拡散しましたよ……」

野戦用の折り畳みテーブルの上には、四つに折りたたまれたＡ４ペーパーが置いてあった。何人もの手を経た様子で、あちこちが泥だらけで硝煙にもまみれていたが、血糊がないだけマシなのだろう。

本部管理中隊通信隊長の都留恵実三佐が、このＡ４ペーパーを開いて土門の前に置いた。

それは奇妙な写真だった。女性三人の生足が、弾薬箱の上で絡み合い、その肌の上をシャワーの水が伝う。うち二人は、つま先まで見えていた。一人は真っ赤なペディキュアを、もう一人は迷彩柄のペディキュアをほどこしているようだ。

見えない場所のお洒落は戦場での彼女たちのささやかな生き甲斐。生きていることの証なのだろう。

だが、土門はやれやれとため息を漏らした。

「あのさ……そもそも変じゃない？　ここは戦場なのに、どうして紙だのカラープリンタだのがここにあるんだ」

「日本人は紙が大好きですからね。とりわけお役所は、何もかもメモメモメモです。ここの野戦指揮所にもモバイル・プリンタが四台あって、いつもフル回転しています」

「それでプリントしたものなのか？」

「おそらく、陵水基地で大量にプリントしたものを誰かがここまで運んだのでしょう」

「ええと……都留三佐。あなたが、水機団の女性

隊員を管理しているわけ？」
「そういうことになっています。その任務での手当はありませんが」
「ここには女性隊員は何人いるのかな」
「今は四〇名います。衛生隊員というか、要は自衛隊病院からかき集めた看護師が増えていますから。それを抜いても、水機団の本部管理中隊だけで二〇名は来ています」
「そんなにか？　君は、いざという時は、銃も撃つんだよね」
「ご冗談を！　長崎市内をパレードする時には広報と割り切って顔にドーランを塗りますが、人殺しなんてまっぴらです。私はそんなことをするために自衛隊に入ったわけではありません。後は、姜三佐にお願いします。私には仕事がありますので」
「そ、それで、三佐殿としてはどうしてほしいのかな」
　土門は隣に立つ自分の部下と交互に顔を見た。
「われわれは、水機団長の決定を聞くまでです。どうこうすべきなどとは言いません。女性隊員の総意はただ一つ。こういう問題で、シャワーが使えなくなるのは困る！」
　そう言うと、都留三佐はさっさと去っていく。
　通信部隊は、すぐ隣にいる。カーテンこそ引かれているが、指揮所の横にテーブルを並べて無線機に齧り付いているのだ。昨今は音声通信はほとんどないから静かだが、それでもほぼ一日中一緒にいたはずの土門には、彼女の記憶が全く無かった。黒子に徹するのが彼ら彼女らの本分とはいえ、驚くばかりだ。
「……あと、なんで君がここにいる？」
　土門は、自らが率いている第一空挺団・第四〇三本部管理中隊付きの表看板を持つ特殊部隊〝サ

イレント・コア〟の一個小隊を率いる姜彩夏三佐へそう問いかけた。

彼女の方は、都留とは違い完全武装だった。Hk416アサルトに、腰にはピストルを。足首のアンクル・ホルスターにも護身用の小さなピストルを一挺持っている。さらに出撃時には、グレネード・ランチャーまで担ぐのだ。

「私なら、水機団長とフランクな会話ができるという理由のようです」

「いや、俺だってさ、一応これでも特技は法務なんだよ。セクハラにだって、人並みのセンスはもっているつもりだが」

「そうですか……」

姜は気のない返事をした。

「一応、その……被害者というか、もちろん被害者がいなければそれで良しというものでもないのがセクハラ問題の深刻なところだが——彼女たちの証言はとったの？」

姜三佐はバヨネット・ホルスターに突っ込んでいたメモ用紙を取り出す。

「ここに写っている三人の女性隊員から事情聴取を行いました。A隊員——自分の名前が出ないのであれば別に構わない。そんなことより、シャワーが使えなくなるのは困る。せめて毎日のシャワーを許可してほしい。B隊員——もし自分に何かあったら、恋人にこの写真を遺影として届けてほしい。あとシャワーの温度が少し低いのが気になる。二、三度は上げてほしい。洗濯機と乾燥機も決定的に不足しているのは許せない。C隊員——男性隊員の士気が上がるのであれば、自分は脱いでも構わない。次の婦人自衛官美魔女写真集に出てもいい。ただし、それなりの手当はつけてほしい。あと、シャワーが使えなくなるのは絶対に困る。そうなったら、手榴弾を指揮所に放り投げる

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。